The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Double-Edged Effects of Social Strategies on the Well-Being of Autistic People: Impact of Self-Perceived Effort and Efficacy
Author(s)	船渡, 錬
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101894
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　船渡　錬　　）	
論文題名	Double-Edged Effects of Social Strategies on the Well-Being of Autistic People: Impact of Self-Perceived Effort and Efficacy（自閉スペクトラム症者の社会的戦略が幸福感に与える影響の検討―主観的努力感と効力感の観点から）

論文内容の要旨

【背景と目的】

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）者は、コミュニケーションの苦手さを抱える一方、その特性を隠す・補うといった「社会的戦略」を用いることが知られている。質的な先行研究からは、これらの戦略を用いることは認知的疲労（社会的戦略の「努力感」）に繋がり幸福感を下げてしまう可能性と、社会の中で生きやすさ（社会的戦略の「効力感」）に繋がり幸福感を向上させる可能性の両方が示唆されているが、質問紙を用いた先行研究では主に社会的戦略の努力感のみに焦点が当てられてきた。また、「努力感が低く、効力感が高い社会的戦略を用いる人は、幸福感が高い」といったように、努力感と効力感の交互作用が幸福感に影響する可能性も考えられる。また、ASD者が用いる社会的戦略は、本研究で使用したCompensation Checklistではマスキング（自身の行動を隠す）、浅い補償（苦手さを行動レベルで補う）、深い補償（苦手さを認知レベルで補う）、アコモデーション（他者・環境に働きかける）の４つの下位尺度でわけており、それぞれ幸福感に対して異なる影響を与えることが示唆されている。以上をもとに、本研究では以下の課題を検討した。

①　ASD者の社会的戦略の努力感・効力感・交互作用は、幸福感にどのような影響を与えるのか

②　使用する戦略の種類は、幸福感にどのように影響するか

【方法】

調査方法：日本在住の18-65歳を対象に、非ASD者を含む調査会社モニター90,000人にスクリーニングを実施した。その中から、ASDの診断を受けたことがあると自己申告した参加者を対象にWeb調査を実施した。更にその中から、質問文を読んでいない不適切回答者を除外した、104人（女性: n = 48; 男性: n = 56）を解析対象とした。

使用尺度：

①　Compensation Checklistを改変した質問項目：ASD者が用いる社会的戦略の使用・努力感・効力感

②　日本語版WEMWBS　：日常場面一般における幸福感の測定尺度

③　日本語版UCLA孤独感尺度第３版　：社会的場面における幸福感の副次指標

分析方法：

①　幸福感・孤独感を目的変数、努力感・効力感・交互作用を説明変数とした重回帰分析

②　幸福感・孤独感を目的変数、Compensation Checklist下位尺度ごとの使用戦略数を説明変数とした重回帰分析

【結果】

努力感・効力感・交互作用を説明変数とするモデルは有意であり（R^2 = .281***）、努力感が高いと幸福感が低く（β = -.42***）、効力感が高いと幸福感が高い（β = .28**）ことが示された。一方、努力感と効力感の交互作用の効果は有意でなかった（β = -.02）。これらの結果は孤独感を目的変数とした解析でも再現された。また、社会的戦略の種類を説明変数とする重回帰モデルは有意であり（R^2 = .273***）、マスキングをより行うと幸福感が低く(β = -.30**)、深い補償をより行うと幸福感が高く(β = .36**)、アコモデーションをより行うと幸福感が高くなること(β = .38***)が示された。一方、浅い補償の効果は有意ではなかった(β = -.13)。これらの結果は深い補償を除いて孤独感を目的変数とした解析でも再現された。

【考察】

ASD者が社会的戦略を用いるにあたっては、努力感が少ない社会的戦略の使い方と、効力感が向上する社会的戦略の使い方を模索することが、幸福感の向上に重要であることが示唆された。また、自身の特性を隠す戦略から、社会的やり取りについて理解を深めたり、他者や環境に対して働きかける戦略に切り替えていくことがASD者の幸福感の向上につながる可能性が示唆された。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　船渡　錬　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	大島郁葉
	副 査	講師	西 村 倫 子
	副 査	教授	吉村優子

論文審査の結果の要旨

本公聴会では、Double-Edged Effects of Social Strategies on the Well-Being of Autistic People: Impact of Self-Perceived Effort and Efficacy（自閉スペクトラム症者の社会的戦略が幸福感に与える影響の検討―主観的努力感と効力感の観点から）という題目において浜松校の船渡氏がプレゼンテーションを行った。

論文内容の要旨として、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）者は、コミュニケーションの苦手さを抱える一方、その特性を隠す・補うといった「社会的戦略」を用いることが知られている。ASD者が用いる社会的戦略はマスキング、浅い補償、深い補償、アコモデーションの４種に分類できると考えられており、それぞれ幸福感に対して異なる影響を与えることが示唆されている。以上をもとに、本研究では①ASD者の社会的戦略の努力感・効力感・交互作用は、幸福感にどのような影響を与えるのか ② 使用する戦略の種類は、幸福感にどのように影響するかという3点において検討した。調査方法としては、日本在住の18-65歳を対象に、非ASD者を含む調査会社モニター90,000人にスクリーニングを実施し、質問文を読んでいない不適切回答者を除外した104人を解析対象とした。使用尺度は① Compensation Checklistを改変した質問項目：ASD者が用いる社会的戦略の使用・努力感・効力感 ② 日本語版WEMWBS ：日常場面一般における幸福感の測定尺度 ③ 日本語版UCLA孤独感尺度第３版 ：社会的場面における幸福感の副次指標であった。分析方法は① 幸福感・孤独感を目的変数、努力感・効力感・交互作用を説明変数とした重回帰分析 ② 幸福感・孤独感を目的変数、Compensation Checklist下位尺度ごとの使用戦略数を説明変数とした重回帰分析であった。結果は、努力感・効力感・交互作用を説明変数とするモデルは有意であり（R 2 = .281***）、努力感が高いと幸福感が低 く（β = -.42***）、効力感が高いと幸福感が高い（β = .28**）ことが示された。一方、努力感と効力感の交互作用の効果は有意ではなかった（β = -.02）。これらの結果は孤独感を目的変数とした解析でも再現された。また、社会的戦略の種類を説明変数とする重回帰モデルは有意であり（R 2 = .273***）、マスキングをより行うと幸福感 が低く(β = -.30**)、深い補償をより行うと幸福感が高く(β = .36**)、アコモデーションをより行うと幸福感が 高くなること(β = .38***)が示された。一方、浅い補償の効果は有意ではなかった(β = -.13)。これらの結果は深い補償を除いて孤独感を目的変数とした解析でも再現された。結論として、ASD者が社会的戦略を用いるにあたっては、努力感が少ない社会的戦略の使い方と、効力感が向上する社会的戦略の使い方を模索することが、幸福感の向上に重要であることが示唆された。

本発表のあとに主査および副査より別々に１ないしは２つの質問（なぜ深い補償のほうが認知的負荷がかからないか、など）をされたが、発表者は追加の分析を紹介し、エビデンスを示しながら妥当な回答を導き出していた。それらの妥当な回答から、論文審査には充分足り得るものだと判断し、本論文審査は合格と判定した。